

2018年のノーベル生理学・医学賞は京都大学特別教授の本庶佑氏ら2氏に贈られた。オプジーボなどの画期的ながん免疫治療薬の開発に道を開いたことが理由である。オプジーボは末期のがん患者を劇的に回復させる極めて治療効果の高い薬だが、その分、極めて高額である。14年9月の発売当初から「高額医薬品」の象徴として高い社会的関心を引いた。

現在そのオプジーボを上回る超高額医薬品の日本上陸が迫っている。早ければ

## 高額薬剤と研究開発インセンティブ

画期的な医薬品の開発は患者にとって喜ばしいことだが、医療保険財政の面からは財政を圧迫するという課題がある。高額医薬品に対する研究開発インセンティブはどのようにあるのが望ましいのだろうか。

製薬企業は、割引率を使って個々の研究開発プロジェクトが生み出す将来収益の割引現在価値を計算し、投資の意思決定を行う。割引現在価値は将来収益が大きいほど、またその収益をより早期に確保できるほど大きくなる。

そのため薬価制度では、有効性や安全性が優れた医薬品には、その優位性に応じて初回薬価を高く設定（有用性加算など）し、また筆者は近年、非価格面からの研究開発インセンティブの維持・向上策が（価格面からの対応と比較して）どの程度有効であるのか研究を進めている。筆者が取り組んでいるのは、予見性向上（不確実性低下）の効果分析である。

# 予見性向上が 誘因高める

年内に承認される見通しの白血病治療薬「キムリア」は、米国で1回5200万円、の価格がついた。



名古屋大学大学院  
経済学研究科講師  
和久津 尚彦

た当面の間その薬価を維持させる（新薬創出加算）ことで、企業の研究開発インセンティブを高めてきた。これらは価格面からの研究開発インセンティブ付与といえる。

一方で、非価格面からの対応も多く存在する。たとえば、幅広く迅速な保険償還や（条件および期限付きであるものの）早期承認制度の拡充などである。医薬品に承認された後、ほぼすべてが迅速に保険償還される。

わくつ・なおひこ 医療経済学、  
産業組織論。ニューヨーク州立大学  
バッファロー校 Ph.D. in Economics.  
1975年生まれ。

